前衛

激化する世界危機を
プロレタリア日本革命へ
日本革命をアジア革命の勝利と
世界革命の突破口とせよ！

反戦・反安保・反帝国主義政策の
反政府実力闘争をのりこえ
工場占拠・二重権力・武装蜂起
・帝国主義打倒の革命闘争へ

毎月1日発行
発行　「前衛」編集委員会
発行人　高橋一雄
連絡先　振替「東京44589番前衛社」
千代田区飯田橋3－1－6飯田町ビル
前衛社　TEL（264）5079
購読料（〒共）　1部　50円　12回　500円

公企体　合理化をめぐる階級的攻防の焦点

郵政労働者は「標準作業」合理化粉砕を通して国鉄労働者と共に反合闘争の第一線に起て!!

全国の同志諸君！　六〇年代後半から本格的に開始された公共企業体の合理化攻勢は、とりわけ運輸通信部門において、現在一つのピークに達している。国鉄においては、日本海ルートの電車化にともなう十・二ダイヤ改正と全国新幹線化攻撃がそれであり、わが郵政においては、九月から開始された「標準作業方法研究発表会」なる、郵政版マル生攻撃がそれに他ならない。ここでは、同じ運輸通信部門で反合闘争を担う立場から、国鉄労働運動の批判を通してわれわれの闘いをみてみよう。

（一）相つぐ順法闘争と国鉄労働運動の危機

五月末から始まった国労、動労の第一波順法闘争は、直接的には、国家権力と一体化した国鉄当局の暴力事件デッチ上げ、組合員逮捕攻撃に対する抗議闘争であり、六月十三日からの第二波は、公労委の賃上げ仲裁裁定完全実施と、「アメリカのベトナム侵略反対」「米軍軍事物資輸送阻止」のスローガンを掲げての政治闘争であった。

また、この第二波によっても結着のつかなかった仲裁裁定のタナ上げに抗議して、二〇日からも第三波の順法が組まれ、更に、二七日の組合員不当逮捕と動労の地本支部に対する不当捜索に抗議して今度は二九日から動労が順法に入った。

これだけではない。九月二日、十四日と二度に分けて仕かけられた総計三万八千五百人にのぼる空前の大量不当処分に対して、早速国労、動労の一体化した強力順法闘争が組まれ、これは現在に到るも継続されている。

同志諸君！

こうして今や、国鉄労働運動の基本戦術として定着した順法闘争の革命的意義はどこにあるのか。

それは第一に、今春闘最大の山場となった四・二七交通ゼネストに恐怖した国鉄当局の、いわば報服的な大量処分攻撃に対して、闘う青年労働者を先頭に直ちに反撃を開始したことである。マスコミをして、「闘争と処分のイタチごっこ」といわしめた執拗な攻撃は全国の鉄道網をズタズタに引き裂き、順法という名のサボタージュ戦の巨大な偉力を発揮した。

第二に、春闘前段から既に開始されていた動労のATS順法闘争から四・二七交通ゼネスト、そして春闘後の第一波順法へと継続される波状闘争は、国鉄労働運動が国労（動労）中央の思惑を越えた下部労働者の闘いによって、事実上、「賃上げ春闘」の枠を突破したことである。

第三に、こうした戦闘的下部労働者のエネルギーは、昨年秋のマル生闘争の一定的勝利がもたらした、国鉄労働者の革命的自信と反合闘争の視点とに、決定的に裏打ちされているということだ。

そして最後に、この順法闘争の日本階級闘争全体に与える影響、とりわけ全逓戦線に与える衝撃力は図り知れないものがある。ブルジョア法＝公労法を逆手にとった順法戦術＝サボタージュ戦は、わが全逓戦線における基本戦術でもあるからだ。

同志諸君！

ところで、十・二ダイヤ改正を一つの頂点とする現下の「処分粉砕・反合」順法闘争は、しかし現在、国労（動労）指導部の闘争歪曲によって、あたかも「処分軽減」「スト権奪還」の、要求闘争路線へと収約されようとしている。去る九月十一、十二日に開かれた両労組の中央委員会でも確認されたこの方針は、処分撤回、スト権奪還をＩＬＯへの追加提訴と、公務員制度審議会への働きかけによって勝ちとろうとするものであり昨年秋のマル生闘争と同じく、第三者機関依存とマスコミ操作に依拠した民同お得意の自己保身路線に過ぎない。

いうまでもなく国鉄労働運動の真の対決点は、田中内閣の「日本列島改造」に依拠してなしくずし的に再編されつつあるとはいえ、財政再建一〇ケ年計画（六九年）と、本年初頭に立案された新一〇ケ年計画＝「国鉄財政新再建対策要綱」にもとづく、国鉄当局の人民収奪と省力化、そして組合破壊をも意図した合理化攻撃である。この攻撃は、昨年の十日末に当局が提出した「マル生運動の中止」提案以降も、何ら変わってはいない。

だとすると、マル生闘争の大衆的盛上がりと「一定の勝利」に気をよくした国労（動労）中央の、「国民のための国鉄づくり」路線とスト権奪還運動は、国鉄労働運動、とりわけ現下の順法闘争を、当局に対する圧力闘争に還元するものであるとみなければならない。

なお、動労内部に一定の影響力をもつ革マルについて一言すれば、民同の地盤なしには何ら存在しえないこの左翼反対派は、民同に対する徹底した面従後言によってのみ党派性を維持しうる宗派であって、主観的にはともなく、客観的には民同の補完物たる位置を一歩も出てはいない。

従って、その無内容な「長時間ストライキ」方針も、順法というサボタージュ戦に対する明確な戦略的展望を欠いているために、結局、政治闘争との「接木」路線に収約されざるを得ないのである。

（二）反合行動委運動と統一戦線の形成

全国の同志諸君！

今春闘後のわが全逓戦線における闘いは、郵政当局の相次ぐ合理化攻撃に対する、反合統一戦線の形成と、それを軸にした職場流動制圧戦の展開であった。

A局に則して、この闘いを見てみよう。

先にわれわれは「前衛」68号において、春闘を含む前期闘争、とりわけA局反合闘争の具体的展開を紹介し、第一に、春闘前段の合理化粉砕闘争を契機に、萌芽的な反合統一戦線が形成されたこと。第二に、班工作と拠点班の形成によって、A局における行動委のヘゲモニーが確立したこと。第三に、敵の一切の支配・攻撃に対して、反動管理者、秩序派「良識者」に対する、「人民裁判」「自己批判強要」の運動で応えること、以上の三点を報告した。

こうして、日常的な超勤拒否と空前の物ダメ戦を背景にした管理者、「良識者」追及の前期闘争は、拠点班の秩序マヒと班長追放を勝ちとり、しかも分会小官僚の権威をトコトン失墜させるに到った。

同志諸君！

われわれの予想していた通り、ここで当局は、気違いじみた必死の反撃に出た。敵をして、「職場ではなく修羅場だ！」とまでいわしめた反乱闘争の爆発に恐怖してとうとう当局は、伝家の宝刀たる「人監」を導入し、その指導のもとに処分攻撃を発令した。それだけではない。「これは正当な組合活動ではない」という合言葉を、馬鹿の一つ覚えの如く繰り返す秩序派、「良識者」を、一挙に全逓から脱退させるという、組織破壊攻撃をも開始したのだ。

図らずもこれが、後期闘争開始の合図となった。敵の反撃によって始った後期闘争は、従って前期反乱闘争の緻密な総括から出発した。①安易に処分を許してしまう闘い方はまずくないか。②行動委の追及と攻撃の目標が、特定の職制に限定されすぎていないか③職制の「人民裁判」に傾斜しすぎて、班の工作が軽視されていないか。④組合上部のダラ幹が、A局闘争の民同的統制を画策しているが、これを全く無視した方針は出せないのではないか。これらが基本的な総括視点であり、これはそのまま、後期闘争に生かされることになる。

ところで、当局の追い打ち攻撃は更に激化した。「人監」の権力によって職場の支配を取り戻すことができると幻想した当局は、人監の常駐化を図り、その指示と恫喝のもとに、停職を含む不当大量処分と職場の二分割提案、という露骨な抱き合せ攻撃を仕かけてきたのだ。

行動委は即座に反撃した。その方針はこうである。

第一に、処分デッチ上げの張本人を徹底追及し、その不当性を大衆的に暴露すること。

第二に、職場二分割攻撃を、分局化につながる一大合理化としてとらえ、その本質暴露と分割勤務拒否の態度を極力貫くこと、例えば、反動新班長の受け入れ拒否の方針がそれである。

第三に、二分割によって当然もたらされる個々の服務改悪攻撃に対しては、その「空洞化」を図ること。例えば、勤務に「穴」があこうがあくまいが、休みを取るという方針がそれである。

そして第四に、「処分粉砕・二分割粉砕」のスローガンで、他局に対する情宣とオルグに入ること、以上の方針であった。

この方針は、統一戦線決定として具体化され、しかも、組合上部の圧力によって屈服路線に傾斜し始めた支部執行部に対する、執拗な「説得」活動をとうして実践化された。民同を方針上で説得して、そのお墨付きをもらうのは、民同に対するわれわれの屈服を意味するか？　そうではない。この時点でわれわれが目ざしたものは、われわれの方針を行動委が単独で強行することではなく、統一戦線を主体としてわれわれの方針を実践化することだったからである。われわれは、民同の統制攻撃によって統一戦線が破壊されるのを何より回避しなければならなかったのだ。

同志諸君！

こうしてわれわれは、敵の相次ぐ合理化攻撃に対し、超勤拒否と物ダメのサボタージュ戦を軸にして、職制と内部の秩序派に対する「人民裁判」「自己批判強要」運動を柔軟に展開しつつも、みせかけの流動制圧戦に陥ることなく、拠点班での行動委のヘゲモニー獲得と、反合統一戦線の形成に全力を上げているのである。

（三）「標準作業」合理化を大衆的サボタージュ戦で粉砕せよ!!

全国の同志諸君！

すでに「前衛」紙上でも報じたとおり、九月から開始された「標準作業方法研究発表会」なる一大合理化攻撃は、われわれが対決すべき当面の最大の課題である。

この攻撃の概略はこうである。

①目的は、「標準作業方法」の徹底、通区能力の向上にある。

②集配普通局全局と、差立・到着区分に従事している全職員一万六千名を対象とする。

③郵便局における参加者の勤務は、原則的には時間外だが、できれば時間内にも実施する。

④種目別には、内務が区分と把束、外務は配達順組立作業。

⑤模擬郵便物、六百通を使用。

既報したように、この攻撃の本質は明らかである。一言でいうと模擬郵便物を使って各労働者の労働速度を測定し、労働密度を強化して生産性を向上させ、しかもそれによって労働者同士を競走させ、ランキングづけるという、極めて悪辣な攻撃である。

しかも注目すべきことは、この模擬郵便物が全郵政＝二組と全逓内秩序派分子によって秘かに作成されていることであり、これはちょうど鉄労の手によって担われた国鉄の〝マル生攻撃〟に対応している。

いうまでもなくこの「標準作業」合理化は、六九年三・二四長期合理化計画にもとずく、機械導入→職場の反動的再編→郵便ダイヤ制へと展開されてきた、この間の郵政合理化攻撃の明確な延長線上にある。しかも、敵の思惑どうりには進展していない郵便ダイヤ制攻撃の未貫徹を、この「平常作業」合理化によって一挙に実質化させようとする点に、この攻撃の重要性がある。

同志諸君！

では、この合理化攻撃に対するわが全逓民同の対応はどうか。驚くなかれ、①ストップ・ウオッチによる労働の「あおり」を中止せよ（要するに、腕時計を使えということだ！）②誤区分検査の心理的圧迫を排除せよ③表彰によって労働者同志を競争させるな④人事上で悪用するな⑤参加を強制するな、という「五項要求」を提出したにとどまり、何のことはない、「訓練としてやるのなら」（！）認めようというのだ！

この全逓民同の不様な屈服と、許すことのできない闘争圧殺策動は、しかし、今に始まったことではない。先に見た国鉄労働運動が昨年来のマル生闘争をつうじてまがりなりにも培ってきた反合闘争路線を、わが全逓民同は、一昨年の年末闘争敗北以来徹底して否定しつづけ、郵便ダイヤをはじめ一切の合理化を許容しつづけてきたのだった。

この一大合理化攻撃に対してはもはや多言を要しないだろう。既に反撃に決起している都下各局行動委を先頭にして、大衆的なサボタージュ戦を展開しなければならない。

まず第一に、「標準作業」合理化の徹底した本質暴露と、民同の屈服、統制攻撃を弾劾することだ。

第二に、「研究発表会」そのものの粉砕よりもむしろ、業命の乱発によって強制される差立てや配達作業そのものに対する、徹底したサボタージュ戦の展開が一切の鍵となる。この場合、「業命拒否」の戦術は、支部・分会段階の動向と、何より行動委主体の力量によって柔軟に採用される必要がある。

第三に、業命の乱発に走る管理者と、この攻撃に手を貸す労働者内部の裏切り者、秩序派をトコトン追及し、「人民裁判」にかけることだ。

そして第四に、この「標準作業」合理化粉砕のサボタージュ、管理者、裏切り者追及をつうじて、闘う下部労働者との「反合統一戦線」を形成することだ。

全国の同志諸君！

現在まで蓄積してきたわれわれの全力量をかけて、「標準作業」合理化を粉砕しなければならない。しかも、全逓民同の闘争放棄、闘争圧殺策動を突破する大衆的サボタージュ戦として展開し、管理者・秩序派追及の「人民裁判」運動と、民同官僚との党派闘争を貫徹しなければならない。

こうした闘いこそが、国鉄労働運動との真の結合を図る路線であり、公労協運動の革命的再編を図る、唯一の道なのだ。

近接する学園を出撃拠点と化し軍事輸送阻止の街頭制圧戦を!!　あらたな労学結合をつくり出し底辺委運動の一大前進を!!

一、戦車輸送の再開は何を意味したか

全ての先進的労働者・学生諸君！闘う人民諸君！

インドシナ人民の英雄的闘いはアメリカ帝国主義の反革命軍事体制の一角を突き崩す決定的な役割りを果した。このことは、同時に日米安保体制を支柱として展開されてきた日本帝国主義の対外政策の基礎そのものの動揺を意味するものにほかならなかった。

今回の相模原における軍事輸送阻止闘争は、まさにこうした日米安保体制の動揺と日帝の外交路線の未確立という敵階級の「虚」をついた闘いであった。以上の事実は「前衛」71号で確認した通りである。

とはいえ、「アジアに位置する唯一の帝国主義国」としてアジア人民の階級闘争への対応を避けて通ることのできない日帝は、「安保体制の堅持」を掲げざるをえない。日本の支配階級がインドシナ革命に対する米帝の反革命介入への支援をそう易々と断念する筈はなかった。彼らは反撃のチャンスをうかがっていたのである。

人民の関心と支持の高揚にもかかわらず、現地闘争が数千の群集と若干のセクト動員及び自治体による合法的圧力の行使の域を越えていないことを見極めた国家権力は、自治体の切崩しを行う一方、五千名の機動隊を投入して補給廠前に69年新宿駅西口型の戒厳体制を布くことにより輸送の再開を強行したのだ。

労働者・学生・市民諸君！

こうした事態が明らかにしたものは何か。

それは、数万の労働者・学生の組織的動員を背景に大衆的基地包囲制圧戦、地区人民戦争を貫徹することを抜きにして輸送強行の決意を固めた国家権力が配備した機動隊を粉砕しつつ、闘争を勝利に導びくことはできないこと、これである。

二、新旧左翼のアリバイ闘争を弾劾せよ!!

相模原闘争は、社会党、共産党及び新左翼諸党派の日和見主義と無気力派をあますところなく暴露した。

我々は、彼らが機動隊の隊列に突込まなかったとか、火炎ビンが飛ばなかったとかいう点でそれを問題にしているのではない。そんなことで輸送が阻止できる筈はないからだ。

彼らの犯罪性は、軍事輸送を現実に阻止し、動揺する安保体制に鉄槌を下す唯一の展望としての相模原地区人民戦争を可能にする前提条件たる労働者、学生の組織的大衆動員を彼らが徹底してネグリあるいは放棄し続けたところにあるのだ。

三、セクト的利害を闘争に優先させた社会党、共産党

「ブルジョア法規」を逆手にとった革新自治体の異議申立てと社会党員による座込みから装甲車、戦車の補給廠内封じ込めと闘争の社会的焦点化の糸口をつかんだ今回の闘いは、飛鳥田横浜市長自らが再三語ったように「自治体による抵抗には限度がある」ことを最初から明らかにしていた。彼は「国政レベルでの解決」に期待することによって社会党の対政府交渉にゲタを預けようとした。

勿論、「もう少し引延ばせば社会党はダウンする」と、政府、自民党に、手の内を読まれていた社会党に軍事輸送をあくまでも阻止しようなどという意志も力もある筈がなかった。現地闘争本部からも「闘争は現地まかせ。党本部は〝ベトナム戦争反対〟などと一片の文書で政府に申入れただけ」（9月9日「朝日」）という反発をうけ、「党本部の積極的乗出し」を要求する声が起るありさまであった。

もし仮に「自治体の抵抗の限界」を突破する闘いを社会党に期待するとしたらそれはどのようなものでなければならないか。

それは、落目とはいえ今なお総評を通じて労働者階級に最大の影響力を保持している社会党が、総力を挙げて労働者大衆を相模原に結集させ、機動隊を数万の大衆で包囲し、その海の中に呑込んでしまうことでなければならなかった。そして、これこそ我々の追求する地域人民戦争の布陣の完了を意味するものにほかならなかったのである。

にもかかわらず、社会党、総評は、労働者の現地動員をサボり続けてきた。

何故ならば、人民の圧倒的支持の中で「闘争の焦点」に労働者を大衆的に動員するということは、労働者大衆が社会党・総評の統制を離れ、帝国主義者に対する怒りを直接に表現する行動に踏出すという危険を冒すことになるからである。

結局のところ社会党は、「火薬庫」に近づきすぎないように注意しながら収拾の機会をうかがう対応に終始したのであった。

8月5日のノースピアにおける社会党員の座込みを「挑発」として非難するなど、闘争の出発点から日和見主義者としての本性を満天下にさらけ出し、赤恥をかき通したった日共にとって、事情は一層深刻である。

社会党に対抗する彼らの唯一の手段は、その大衆動員力にある。ところが、機動隊に追われた群集をスクラムで押戻すなどの犯罪的行為を積ね、市民の間においてすら「闘わない日共」という定評を確立してしまった共産党にとって、自派の労働者、学生を現地に総動員することは、「唯一の前衛党という神話を暴露する教室」に生徒を引卒していくことを意味したのである。

彼らは、一握りの人身御供を補給廠前に陣列し、市民が浴びせかける罵倒にひたすら耐えさせることによって、その場しのぎを続けるほかなかった。

四、重ねて新左翼諸派の没落を確認せよ！

闘争の過程で示した無気力振りについては、新左翼諸セクトにおいても既成指導部に劣らないものがあった。

新左翼最大の党派、革共同革マル、中核さえ、その動員は、最高時で七－八百名に止まった。それも学園からの大衆動員を全く放棄して活動家をひっかき集めたあげくにすぎず、彼らが一時期ともにコンスタントに二千名の結集を維持していたことから見ると彼らの凋落振りは見るも無惨であった。その他のセクトはおして知るべしである。

先進的労働者、学生、市民諸君！

動揺する安保体制を追撃する絶好の機会の到来にもかかわらず、何故にこうまで彼らは無気力なのか。

それは、第一に、彼らがインドシナ人民の闘いの前進による日米安保体制の動揺という情勢を正しくとらえることができないことに起因している。

彼ら新左翼は、十年一日の如く、そしてまた口裏を合わせたように――69年日米共同声明以来の日米共同反革命体制の強化の延長上に軍事輸送問題を位置づける――というアジテーションを繰返えすのみであった。

度重なる「敗北」に腑抜けとなり、思考停止に陥っている彼らに「追撃戦」を敢行するパトスを期待するのは無理というものであろう。

第二の理由としては、67年羽田闘争に触発された階級闘争の自然発生的高揚に彼らがあまりにも無自覚かつ没主体的にかかわってきたことをあげなければならない。

彼らは、キャンパスでアジっていればどこからとなく学友が現われ、結集してくるという事態に馴れすぎてしまったために、クラス・サークルに介入し、徹底した討論を通じて大衆を掘起す作業を怠るか、あるいは忘れてしまったのだ。

抜けガラ同然の新左翼諸君！

一度でいいからクラスに入ってみたまえ。米帝のインドシナ反革命戦争を是とする学友など一人もいないし、素朴な表現であってもベトナム人民への共鳴と連帯を口にしない学友もいないことがわかるだろう。

これだけ広範な闘争を支持する潜在的大衆が存在するにもかかわらず それを基地包囲、制圧の大衆戦に結合しえない理由は、ほかでもない、左翼の怠慢にあるのだ！

我々は、神奈川大学をはじめとして、クラス・サークル末端からの学生大衆の組織化を推進しており、その成果を獲得しつつある。

五、「群集」を戦闘の中で鍛え抜くと同時に、内部に底辺委運動の核を形成せよ！

敗け犬左翼諸君は、不定型な群集として闘いに参加した労働者、学生、市民に対する指導と組織化の情熱をも失っている。

群集と一口に言ってもその構成主体は、工場労働者や全共闘くずれの学生であり、彼らを戦闘で訓練し、その先進的部分を組織化することは、人民戦争の陣型を強化すると同時に、「社共」にとって代わる新しい潮流の形成に実体を与える運動となるだろう。

にもかかわらず、9月18日の深夜から翌朝にかけて補給廠前を埋尽した大衆的座込みを「群集」に提起したのは、ノンセクトの学友や、「ただの市民が戦車を止める会」の人々であった。その時、セクトの連中は何をしていたのか。彼らは各々が所有するテントの前にポツンと座込んでいたにすぎなかった。座込み戦術が革命的か否かを云々するのは別の話だ。どうせ座込むなら、何故、大衆を巻込んで座込もうとしないのか、この辺にも彼らの政治党派としての破産が如実に明らかにされている。

六、輸送コース周辺の学園を出撃拠点と化し、軍事輸送阻止の大衆的街頭制圧闘争を貫徹せよ！

全ての先進的労働者、学生、市民諸君！

革新自治体のマッチによって点火され、社会党のポンプによって水をかけられた相模原闘争ではあるが、社会党が屈服路線に陥り、自治体がその限界を露呈した今こそ、我々が闘争を真に革命的な闘いに再組織すべき時なのだ。

それにはまず、学園からの大衆動員を行い、学外に溢れさせることから始めなければならない。そして、相模原からノースピアに至る搬送ルートに近接する諸大学に結集し、そこを出撃拠点としつつ戦闘車輛輸送阻止の大衆的制圧戦を繰広げるのだ。

先進的学友諸君！

とりわけ神奈川大学は、当局の支配体制が恒常的に麻痺しておりしかもノースピアから徒歩でわずか30分足らずの距離にある。ここは全ての闘う人民にとって最良の出撃拠点となりうるだろう。

全ての労働者、学友、市民諸君！

安保体制に致命的な一撃を与えるためには学生の力だけでは決定的に不充分である。

それぱかりではない。

軍事輸送阻止、基地機能麻痺闘争を工場占拠ゼネスト－二重権力－プロレタリア独裁樹立の革命的権力闘争として発展させるためには、是が非でも工場労働者の内部に革命的中核隊を組織しなければならないのである。このことは同時にまた、社共の階級闘争におけるヘゲモニーを奪取し、新左翼諸派から擬制の革命的左翼の仮面をはぎとる過程でもあるのだ。

とりわけ、社共が基地闘争への大衆動員を回避している情況の下では、学園での大衆の組織化を完了すると同時に、基地労働者や周辺の工場労働者との結合が全ての先進的学友の任務として主体的に引受けられなければならない。労学底辺委員会運動の推進が問われているのだ！

労、学、市民の巨大な渦で機動隊を包囲、分断し、孤立した部隊を連続的にせん滅せよ！こうした闘いこそ、ベトナムにむけた軍事輸送を阻止し、インドシナ人民の闘いとの革命的連帯を実現する第一歩を切拓く闘いとなるだろう。

（三面から）

特に、神奈川大学は、その位置から、京浜地区の工場、職場闘争の要としてあり、京浜地区反乱の要所としてある。と同時に、基地に取りまかれた神奈川における、基地闘争の拠点として、今後の反戦闘争のキスウを決する点にあり潮流化の要にもなっている。我々は、このことをふまえ闘いを展開しようとしている。

我々は、その第一歩として、闘争委を中心に、九月の授業再開後ただちに、それまでの成果と、限界をふまえ、大衆動員を勝ち取るべく情宣活動を開始した。闘争委を中心とした部隊は、授業へ、クラスへの大胆な介入を背景に、現闘体制を組み、現地闘争を断固として闘った。現地闘争で我々は授業再開直後、十数名の結集を勝ち取り、高校生、他大学と結合して補給廠前で、他を圧し、驚かせるほどの大胆不敵なデモンステレーションを貫徹し、敵が攻撃を開始するや、何もしない新旧左翼を尻目に、強固な意志一致の下で分散し、機動隊との攻防を群衆と結合し、せん動し、先頭に立って機動隊が逃げれば追撃しぬくという文字通りの群衆戦を負傷者を出しながらも闘い抜くという変幻自在な活躍を示した。

我々はまだ、微力ではあるが、拠点闘争の積み重ね、底辺委運動の展開を通し、反戦闘争を取り組み、絶えず、学内に還元していき底辺委運動の潮流を創出していくといった闘争を大胆に展開しようとしている。新たな潮流をめざし我々は、その過程でたとえ闇夜であっても恐れず立ち向っていこうとしている。

先進的労働者、学生諸君！

新たな全国潮流をめざし、更に更に前進せよ！

共産主義武装行動委・神大班

危機のなかの日本帝国主義
権力3号
一〇月中旬発売

□危機のなかの日本帝国主義
一、転機としての一九七一年
二、世界革命の震源アジアに位置する日本帝国主義
三、ドル・ポンド体制崩壊のなかの日本帝国主義
四、日本帝国主義の危機の政治力学
川上忠雄
〈シンポジウム〉
「危機のなかの日本帝国主義」をめぐって
玉田美治、馬場宏二、山本潔、佐藤浩一
樋村乃介、成島道官、川上忠雄

□革命的権力闘争の運動論的考察
佐藤浩一

□三菱独占下の底辺労働者の氾濫
70年安保闘争の中で闘われた職場占拠闘争の教訓

□三〇年代危機とドイツ階級闘争
―コミンテルン・ドイツ共産党の敗北の教訓―
波川宏

日産資本・組合官僚の切りくずし攻撃をはねのけ
拠点職場を防衛し、反合闘争で反撃せよ!!

昭島地区自動車戦線の工作と、K・Pに於ける5人組の闘争の教訓こそ、今日の自動車産業の再編合理化に対する工場反乱を、行動委によっておし進めなければならない事を教えている。

日産系列第二次下請け部品工業のK・Pの合理化は次の様に進行している。

ニュースカイラインを突破口とする今日の部品工業合理化の目的は、原価引下げを以って、外資導入による小型車の国内市場化に備えるものであり、輸出競争力の一層の強化にある。今年に入っての相次ぐ合理化は、日産からの天下り人事により始まった。技術管理課の実施(IE)そのプロジェクトチームの設置により、品質管理課設置、品質チェック再検討を基調としてマルチ化、プロプレシブプレス、そして来春の青梅プレス新工場の「群システム」操業に備えるものである。

従来の「技術教育を中心とした職制教育と、作業長（指導員）とその補佐たるチェックマンシステム」を体制とする実施効率上昇（生産性向上運動）をより強化する合理化が進行している。K・Pの合理化は多分に、IE（インダストリアル・エンジニア）に重点が置かれており、チェックマンシステムを中心とする生産性向上は部労組合支部を通して、本部により指導されるものである。ただし、個別反逆に対する労務管理は、多く、企業の自主制に委ねられている。

近代的労務管理は、現場第一線監督者の実務教育を通して、組長、班長、作業長の科学的技術的任務をシステムとして管理する所に特徴がある。K・Pの今年に入ってからの合理化は、こうした方向で進んできたのである。こうした変質は当然、職制の企業への組み込み、一個の単能化、監視労働の強化を必然とするに至った。

マル生運動と共に、生産性向上（設備変更、投資等のレイアウト、実施効率）の運動は、勿論、生産ラインの秩序を基調とするものである。ゆえに、合理化闘争の環はなしくずし的に変質していく労務管理、新しい機械、新しい仕事、新しい職制、その新しい支配のし方を内側から破壊していく闘争として闘われなければならない。即ち実施効率を現在以上に上げさせない方針、戦術が、反合闘争の選になるのである。

K・P5人組闘争は、こうした分析基調に立って闘われたものではない所に、その挫折の一端があるのである。ひと口に言うならば今日の日産系列の合理化とは、生産性向上運動の歴史の重み、そのシステム化、班長、指導員等のスタッフ教育を中心とするものであるが、これらは、労働者に対するノルマ達成の為の恫喝体制を基調とせざるを得ないのであり、この恫喝に屈しない闘争が、工場反乱になるのであった。5人組は、この恫喝、組織分断攻撃の前に、有効な方針を実践しえずに、挫折したのである。

K・P5人組の闘争が示すものは、工作者、あるいは、行動委主体が、組合とは独自に、一定の力量に達する事を、非公然と進めざるを得ない事であり、しかも、この非公然とは、政治的演出を似ってする公然の形態をもたなくてはならない、という点である。しかも、この工作が反合理化闘争に切り結んでいなくてはならない。

K・P5人組闘争は、反合理化闘争に出発しながら、賃闘に収約させられていく事の圧力によって、後退を余儀なくさせられたのだ。

ここで、K、P5人組の闘争を整理する。

①5人組成立と、Y君の不当解雇闘争ビラ入れとの連帯期。地区連合形成の追求。

②資本への発覚を通して、組合費値上げ反対・条件闘争。

③賃闘

①について

5人組は、K・Pに於ける労務管理、職制に対する「人間関係」不満や、組合不信を基調として結成された。これと前後して、他工場工作者F氏の不当解雇闘争ビラを、工場に持ち込み、公然とした読み合わせを進めていた。ただしこの「ビラ」は、F君の解雇問題に側した、「賃金よりも 人間性を」という、これ自体の意義を認めるとしても、大衆闘争の具体的方針の決定を各工場工作班に要請する、という性格をもつものであった。そうである為に、ビラが、多分に啓蒙の性格を持つものであり、暴露、宣伝の性格を持つものではなかった。又、ビラのこうした性格は、資本にしても「他岸の火事」というものであった。又、K・P5人組とF君の交流に、T・S・O・K工作班も参加させる事により、地区連合を追求した。しかし、この 地区連合 追求は、T・S・O・K・T・Hの行動委組織化の主体的訓練として位置づけたがビラの基調に示される当時の工作班の問題意識（人間性回復闘争を反合理化闘争として表現する）はこの地区連に、啓蒙的性格を、故に、多分に抽象的、一般論的傾向を持ち込み、又これは、5人組の内部にある、自然発生性と一般的に結合してしまう、という問題を持ち込んでいた。故に、この地区連は、具体的内容なき地区的不満分子の集合になり、各工作班の工作水準を引き上げる事にはならなかった。しかし、ともかく、K・Pに於いて、行動委へと発展しうる可能性を持つ集団が存在した、のであった。

②について

地区連は、非公然に会議を進めてきたが、資本に発覚してしまった。この時、資本は、組合を通して、個別呼び出し、強制残業、強制出張、日曜出勤、運動会、その応援団副長などの5人組の組織分断攻撃をかけてきた。

工作者は、従来残業拒否を行ってきた。その関係上、5人組の分断は容易に効果を上げさせてしまったのである。

この時、自動車総連移行の賃金調達の為の組合費値上げ攻撃がかけられてきた。これに対して、5人組は、職場討論の発言シナリオを作成してのぞんだ。その基調は「組合は賃上げもしないで値上げをするのはおかしい。組合費値上げをするなら、手袋位無償配布するよう企業に働きかける誠意を見せろ。組合活動の具体的方針が不明確だ」という様に、組合と労働者の敵対関係を浮かび上がらせようとするものであった。しかし、この場合、手袋無料配布要求は、月六〇〇円という小さな問題すぎて、これ自体では大衆をオルグしきれなかった。ただ、執行委との激しい口論にのみ、政治的意味があった。組合は、これに対して、全国一せいの無期名投票に前以って、「票読み」の為に、挙手による賛否 を問うてきた。彼らは、公然と五人組の大衆からの分離を打ち出したのだ。態度保留者を10名前後出して、この問題は片がついた。

五人組は公然と登場した。その事に意味があった。問題は、これ以後、賃闘までの、無方針の時期をつくってしまった事である。ハイキング策動をしながら、時間をかせぐ組合は、賃闘に入っても、時間つぶしを画策した。

③について

労連賃闘資料読合せで開始された賃闘は、個別工場分析資料の未完成を理由に、約一週間の空白をつくり出す。この間も、運動会の準備は進められていった。相当にイライラした状態で職討開始を待っていた組合員大衆の前に、K君（試用中）の発言禁止が加えられた。そして、賃闘早期決着か混乱かの恫喝を公然と宣言する。工作者、五人組は完全に大衆から分離させられた。しかも、大衆は我々とは別の一潮流をつくっていた。（組合費問題以後）彼らは、「プラスアルファの方式」は不安だ。プラスを含めて一万円台の要求に結集した。組合は、一万円台要求（回答を意味する）を約束せざるを得なかった。勿論、この約束は賃上げの獲得額と共に「ウソ」であった。

こうして、賃闘は組合の恫喝とウソに固まって終った。

自動車産業の賃金の基本は、生活給である為に、賃闘を組織する為には、それ相当の工場内流動を不断に蓄積しない以上、賃闘の重圧の前に、行動委は屈服せざるを得ないのである。逆に、賃闘を似って、行動委が 組合を 支配する時、その効果には非常なものがある事はいえる。

こうした、K・P工作班の5人組闘争は、一つの挫折を持たらしたのである。

この理由は何か。組合とは全く異質の行動委を追求する為には、何をなすべきであるのか。我々は工作の長期的展望を持っていたがその為に、各工場の具体的分析を追求する努力をおこたっていたのである。合理化の自動車産業全般の情勢を、工場の特殊性と結合して分析するに至らなかった我々の限界は自然発生性に支配される集団をつくった。大衆的行動委は、当初、多分に自然発生的ではあるけれども、行動委への過渡期に於いて、行動委の内容=個別工場の合理化分析を追求する事なしには無方針無戦術か、逆に、あまりにも一本気な、組合反対派戦術に陥込む事になるのだ。実際、5人組の現場での活動は、つきつけられた闘争を準備する段階としては、残業拒否であった。確かに、残業拒否やトイレなどでのサボリにはその規模が大なる時には生産計画を狂わせる、という反合闘争の一戦術にはなる。だが、二名、三名という小人数のそれは、それ自体が「シワ寄せ」にならず、逆に、残業しなくても食える奴はイイとか、あいつはサボってばかりいるという世論に、屈服せざるをえないのである。

我々は、工場の中ではね上がったが、労働者の基本的な同情は失っていないのであり、又、解雇される事はなかった。小工業の場合解雇する労働力の余裕はない（この時、数人の退職者を出すから）し、又、裁判闘争などに、巻き込まれる事をも警戒するのである。これは、小資本の一大限界線である。

我々は、行動委建設を、個別工場の具体的内容なきままに進めたが為に、又、賃闘に巻き込まれていったが為に、又、恫喝の前に、一角が切り崩された。だがこれは発展過程の一頓座にすぎず問題は今後のわれわれの闘いいかんにある。問題の鍵は、合理化、それ自体に切り結ぶ職場闘争であり、恫喝に屈しない運動の飛躍にかかっているのである。普断の職場流動化と、暴露宣伝、こそ行動委建設の鍵であるといえよう。

三多摩行動委連合
自動車戦線

神大を拠点にし
相模原闘争を貫徹せよ

神大

先進的労働者、学生諸君!

八月四日深夜、ベトナム人民の血しずくを振り払うかのように、国道を突走していた戦車は止まった。自然発生的な外被をまといながらも、戦車輸送阻止の闘いは、労働者、人民の圧倒的な支援の中で、相模の台地を焼きつくした。

九月十九日早朝、機動隊五千による強権的な闘争破壊ーテント村破壊、装甲車輸送強行にいたるまで、一ケ月半にわたる期間、相模補給廠前は、大小のテントが林立し、新旧 左翼、群衆が 入り乱れ、修羅の空間が現出した。基地ーノースピアにいたるルートは、完全にマヒし、圧殺を試みる権力との攻防が、群衆の波の中でくり返され、英雄的インドシナ人民との連帯、基地機能マヒの大衆的反乱状況が作り出されていった。

しかし、この状況下での、群衆の生き生きしたエネルギーの爆発に比らべ、新旧左翼の退潮は目をおおうものであった。

もちろん日共は、始めからいないも同じであるが、「国内法を守れ」と合法主義で登場し、一見ヘゲモニーをとっているかのような社会党も、まともな労組動員もできず、又、九月十八日には早々と逃亡を決めこみ、革新自治の勝利だと総括しようとしている矢先、十九日の政府の居直り発言のパンチを受け、「オロオロ」するというみじめさであった。

一方、新左翼も、いつもながらの実力阻止、粉砕のかけ声も勇ましく悪戦苦闘したが、退潮はいかんともしがたく、党派動員でお茶をにごし、大衆動員はかけられないでいる始末だ。群衆に、「もっとやれ、突っこめ」と逆にあおられ、これ又、只「オロオロ」するだけであった。

だが、その反面、群衆の活躍はめざましく、特に、不満を持った労働者が、生産点での不満を解消できずに、石を 投げ、機動隊との攻防を展開するという情況が各所でみられたのである。

確かに、自然発生的、分散的であり、わずかの機動隊が突込んできても逃げるといった様な情勢であった。しかし、一度、これを指導し、反乱状況を作り出すことは容易であった。それをやりきる十分な、質と数を持った部隊がいれば。

ともあれ、このことは、一つの未来を予想させ、展望を与える。

このような情況での方針とは、群衆と 結合したすぐれた 部隊による群衆戦の 展開によって 基地包囲の大衆的な反乱の爆発を追及することである。群衆のヘゲモニーをとったものが、運動のヘゲモニー全体を獲得できるのだ。

十八〜九日の経過は、それを証明している。そのヘゲモニーをにぎった「戦車を止める会」が全体のヘゲモニーをにぎったのだ（もちろん市民主義的運動に収約させてしまう結果になったのではあるが）

我々は、この間、昨年のロックアウトとそれへの追撃の闘いのエネルギーを背景に、スペイン語学科を中心に、教授追及、授業介入団交といった連続的な闘いを組み教授の馬鹿さかげんを暴露し、教授を追いつめてきた。

と同時に、我々は、学生闘争の個別的限界、実体的な労学結合を貫徹しないかぎり、展望を持てないという事実に取りくみ、底辺委運動を追及してきた。つまり京浜地区行動委連合に関わる中で工場職場拠点の実質化を計り、京浜地区の一大潮流としての飛躍を勝ち取ってきたのだ。そして又、更に運動を他職場へ波及させる使命を持って、ビラまき活動等を行いつつ、学生、高校生の結合と底辺委運動主体の確立を急いできた。

そして、その過程での活動範囲の限界性、全体化するための限界をふまえ職場、工場、学園拠点の運動を前提に全国的潮流化の更なる追及の必要性から反乱闘争への取り組みを決定した。

（二面へつづく）

職場闘争潮流の公然たる登場

―9・17集会50名で成功

京浜地区行動委連合

各戦線の闘争報告

去る九月一七日に開かれた「工場職場闘争連帯討論集会」は、約五〇名の参加のもと、四時間にわたる熱心な闘争報告・討論が展開され、圧倒的な成功をかちとった。われわれはこの討論集会を、わが行動委連合を軸としつつ闘う労働者が強固に結集する地区的結合体の確立をめざした第一歩として位置づけ、そしてその第一歩を確実に踏みだすことができた。

まず、参加した戦線および拠点を紹介しよう。

戦線は自動車、造船、医療、教育、電気、運輸、郵便、学園、高校の九戦線であり、工場、職場別の内わけでは 十数拠点に のぼった。この戦線の多様さもさることながら、とりわけ公然たる拠点闘争を展開している造船や運輸労働者たちの参加は、全参加者の注目をひいた。

討論集会は、冒頭に行動委連合からの簡単な報告に始まり、各戦線の闘争報告に入った。

まず自動車

部品工場および総合組立工場からの報告がなされ、工作者の定着職場グループの核の形成、その運動体への転化と、各段階での特徴を浮きぼりにしつつ、行動委建設の過程が述べられた。ここでの行動委建設は、資本にたいするサボタージュ戦や心理戦を多面的に駆使しつつ、進められてきた。

造船

不当解雇を契機にして、合理化をおし進める会社・組合（同盟）との対決へと発展。とりわけ組合官僚との対決は、職場集会を中心として大衆的規模で大胆に展開されている。

医療

病院における看護助手の結束がきっかけとなり、当局・組合官僚との闘争をとおして拠点職場は三職場に波及した。この三職場は相互に結束しつつ、職場流動戦を展開している。

教育

中教審のうちだす「能力主義」にたいして、アンチ能力主義の視点を対置。今後、このわれわれの視点を目標にして、具体的な日常の実践をどうおし進めるかが問われている。

運輸

組合青年部を中心にして、会社との取引に走る執行部との対決を展開している。この青年部の力を背景にして、現場そのものの中に闘う組織を定着させることが重要な課題になってきている。

学園

相模原闘争をめぐって、活動家動員だけでお茶をにごそうとしている自治会主義者に対し、行動委は大衆動員をつうじて学園拠点の形成を目指す。また同時に、労働者に対する工作（底辺委運動）を追求している。

高校

学校当局の相次ぐ言論弾圧、長髪禁止などに対して、クラスを基盤にして闘争を組織している。

最後に郵便

連日にわたって合理化をめぐる攻防戦が激しく展開されており、当局も「これは職場ではなくて修羅場だ」と悲鳴をあげるほどになっている。全逓執行部が屈服を続ける中で「全逓版マル生」攻撃は相次いでかけられているが、行動委は班を制圧しつつそれを基礎に大衆的闘争委をつくり、いわば職場全共闘運動ともいうべき大衆的反乱をもって反撃している。

われわれのえた教訓

以上のような闘争報告を踏まえて全体討論に入り、他地区の仲間からも鋭い意見が寄せられた。そしてこの討論をつうじて、われわれはきわめて重大な教訓を得ることができた。

その第一は、自動車戦線における職制追及・サボタージュ戦を、敵（資本および右翼組合）の攻撃プログラムの中にガッチリ位置づけ、その攻撃に対する具体的な反撃として展開しなければならないことである。

つまり、ラインにおける疎外労働一般に対するサボタージュ戦一般であってはならない、ということだ。なぜなら、それは、仕事に不満をもつ労働者たちの結集体にはなりえても、工場職場の階級関係=政治関係を鋭く読みとって敵の攻撃の環に対する反撃を組織しうるような政治組織=運動体とはなりえないからである。われわれの行動委運動とは職場において敵の攻撃プランに対して不断に反撃を展開しつつ、職場末端から直接に反乱をつくりだすような確固たる政治指導部でなければならぬ。

そして、三多摩の仲間からの指摘もあったように、いまや自動車産業は巨大な再編成期を迎えつつあり、それを乗り切るための手を着々と打っているのである。とりわけ部品工場は、親会社による系列化の推進によって、再編の焦点となっている。しかもその他ならしとして、各部品工場における労務管理体制が再編強化されつつあるばかりでなく、十月初頭の「自動車総連」結成をつうじて、かの悪名高き「日産機動隊」の支配の確立がもくろまれているのだ。

われわれは、こうした敵の動向を速やかに把握し、あらゆる戦術を駆使して全力で反撃を組織するつもりである。

さて、教訓の第二は、長崎社研を中心にした「少数派組合運動」の評価をはっきりさせる必要がある、ということだ。

われわれにしても、労働運動における「合法的領域」の利用の可能性を全面的に否定するわけではない。問題は、職場占拠反乱を担う戦略部隊をつくりだす根本とは何かということである。すなわちそれは、資本・組合官僚による全面支配下において、つまり全く「民主主義」が存在しない中で、非公然・非合法闘争を担う部隊を直接に準備することが根本でなければならない。その限りでのみ、「合法的領域」の利用の可能性いかんが問題となるのであって、「少数派組合運動」が戦略的に自己目的とされた場合には、一種の待機主義とならざるをえないだろう。

ともあれ、この問題についてもわれわれは早急に本格的な解答を与えることを問われている。

拠点闘争の構築に全力を

以上の重要な教訓を真に自らのものとしうるか否かは、今後われわれが拠点闘争を構築していく中でこれらの教訓を実践的に生かしうるか否かに、かかっている。

とりわけ、すでに不抜の拠点闘争を築きあげた郵便戦線全体に切りこみ、反乱闘争の波及をなしとげることが緊急の課題となった。また、すでに述べた自動車戦線は、産業再編成に伴なう攻撃激化に対して反撃を組織し、拠点闘争をつうじて地区的結合体の要めとなることを要請されている。

討論集会の成功も、われわれの登場のほんの第一歩にすぎない。そしてわれわれは、第二回目の全体結集を、文字どおり行動委による拠点闘争を軸にして、さらに広範な戦闘的労働者の参加をかちとりつつ行ないうるように、全力をあげるつもりである。

公判日程
十月〜十一月

10月11日（水）午後一時より
横浜地裁特号法廷
東海大一〇・五〜八ロック・アウシュヴィッツ体制粉砕闘争
第十二回検事証人調べ

10月21日（土）午前十時より
東京地裁五〇六号法廷
明学大三・一七ロック・アウシュヴィッツ体制粉砕闘争
第十四回弁護人の被告人質問

11月1日（水）午後三時より
東京地裁二〇六号法廷
明学大九・一三記念館反革命ロック粉砕闘争
第五回弁護側証人調べ

日産争議（1953年）
―その戦略的教訓

松村　喬

一九五三年五月賃上げ要求に端を発し、同年九月二一日組合側の敗北のうちに終止符を打った総評傘下全自動車労組日産自動車分会の争議は、現日産社長川又克二の言を借りれば「今日の日産の出発点」であり、その瞬間は「ロックアウトを決断した時」であった。まさにこのロック・アウトにより五〇年労働運動の職場生産過程の資本支配を拒否し、体制の枠を常に危機に陥れていた戦闘的グループの個別撃破の突破口=生産性向上運動の突破口が切り開かれ、同時に現在の日本資本主義の生命源である 主要な 基幹産業ー電機（コンピューター）、自動車、鉄鋼が 貿易産業として 確立し発展する 契機を つかんだのである。その意味で日産争議はまさに天王山の闘争であった。だからこそ、日産における階級的攻防をふりかえってみることは、自動車戦線の階級闘争の休戦ラインを我々におしえるとともに、日本資本主義の神話=生産性向上運動の出生の秘密のベールをはぎとり、みにくい敵の姿を明らかにするであろう。

また、この日産争議においては合理化攻撃のまえに全国産別組織が一分会の敗北をもって分解し、一挙に当時の最強組織が突然、喪失してしまった。したがってその検討は、主体的に生産性向上運動=合理化攻撃をめぐる攻防戦とは何か、いかに闘われねばならないかをも明らかにするであろう。

この日産争議は事実、一九五三年五月より闘争を開始したとえ、七月十六日までは交渉であり、七月十七日から主要部門の無期限ストに入ったが、八月三日には組合は団交再開、生産の再開を申し入れ、事実上の後退を開始した。したがって本格的闘争はけっきょく十七日間であった。しかしこの短い期間に闘争が従来の闘争の方法における戦線の延び切りに直面し企業連合組織である全自動車及び三社共闘の質的飛躍を集中的に要求された。だが、大衆のエネルギーが喪失していたわけではけっしてなかったにもかかわらず、すぐれた指導部の経験主義的戦術左翼の枠をこえなかった情勢判断と闘争指導の限界のゆえに闘いはゆきづまった。そしてこの時点から八月三〇日第二組合結成と九月二一日の妥結、十月十五日を均衡点とする全自分会員の第二組合へのなだれの如き脱退、それに続いての全日動車の全体的分解へど崩れ去り、敵の追撃にせんめつ的打撃を受けるのみとなった。

こうして日産争議がロックアウト攻撃・第二組合の発生というお決まりの資本の収拾ルートの筋書によって決せられたとすれば、一九二一年の神戸造船争議以来一貫している日本の階級闘争の中に流れている戦略的欠陥にどぐにメスを入れなければならないであろう。

一、前史または争議自身の序曲

日産は一九四五年九月GHQにより閉鎖機関に指定され、四七年四月〜五月公職追放により山本惣治社長は辞任し、箕浦多一が社長に辞任し、興銀より川又克二が取締り役に就任する。六月に自経連（自動車経営者連盟）が創立され四八年、自動車復興会議解散される。そして日産は四九年に企業再建整備法により整備計画認可申請書提出、五一年企業再建整備計画を完了し、箕浦多一が辞任し、浅原源七が社長になる。

この間、日産は職制度に関しては五一年には混乱をさけて営業・調査室などの整備程度しか手を付けず、そのかわり経営協議会を活用していた。

だが五二年一月に新体制を実施し生産部門に総務部を新設し、工場の独立採算制を推進しはじめるのである。

〈経営協議会と労組〉

日産は終戦とともに全員が一たん解雇され（戦争責任慶賦）、そしてそのまま復職（約八三〇〇名）、四八年二月には日産重工従業員組合が結成され（四七八三名）、社内民主化の徹底、経営協議会の設立へ向かった。そして八月第一回経営協議会が開かれ、給与制度、生産、業務運営方針・厚生等の検討がおこなわれた。他方四七年一月全自東日本地区協議会が結成され、自動車危機突破大会が開かれるとともに、四月日産重工労組（益田哲夫組合長）、全自準備会結成大会、四八年三月全日本自動車産業労組単一組合結成大会とすすみ、十二月ドッジライン反対、企業三原則反対二四時間ストが決行された。

しかし、四九年十月経協で人員整理案が提案され「良心的職制幹部」の指導のもとで、労使協調的組合（事務、現場、職制等の混合組合）の矛盾が噴出し、「興銀の融資を受け、その提示のとうり企業整備を強行する代償としておれたち（現場労働者）を首切るとは何ごとだ」という怒りが幹部組合から労働者の自主的組合に切りかわる転換点となった。「下からの大衆行動の中から職場交渉と青年部の独自交渉」が生まれ、職場討議ということが一つの力としてのし上がってきた。

まさにこのような過程の中から労働者が生産をにぎる職場組織ができあがったのである。

〈当時の主力横浜工場の寸描〉

そのなかで主力の横浜工場はまだ米軍接収地に鉄カブトのガードが囚人を扱うようにして労働者の身体や持物を一人一人検査していた。

四千人を越える労働者が働く横浜工場は「流れ作業方式」をとっているが、代表的工程としての素材加工、鍛造仕上加工は摂氏四五度という高温で塩や梅干をなめなめやっており、結核や胃腸の悪いものが多かった。

機械の八割はガタガタで流れ作業も人力による場合が多く、切削の切粉はひどく三日でシャツが真赤になるので裸でやると粉が毛穴に入ってくるという労働環境であった。

そして資本は流れ作業方式に見合うプレミアム賃金制度として団体請負方式を利用していた。

また、中番勤務（午後一時から午後九時）が一部に導入され、五三年の四月以降、三割増産（コスト引き下げ）という攻勢をかけてきていた。

平均年令は約三四歳、学歴は戦前は小学校、高小卒で養成所を通じて採用されていたが、戦後からこの頃にかけては新制高校卒のものが多く、青年工では夜学にかよったりするものがいたが、疲労の為に一年程度でやめてしまうありさまであった。

こうしたなかで組合は春秋二回の賃闘をくりかえし、大衆討議で未熟練（未経験）一万円、中級熟練（経験八年）二万、高級熟練（経験一五年）三万円を最低賃金としこれに技能、熟練、仕事の強度を加味して六本柱の賃金を要求し職場では職制と職場大衆との激しいカミ合いが発展しだしていった。

しかし他方、部課長の紹介づきの人間をやといながら臨時工の本工採用には試験を行い、「再軍備をどう思うか」「何党を支持するか」を聞き、更に自宅附近の聞込み調査等をやりはじめ、さらに各工場、部、課の独立採算制の強化をテコに職場交渉の封じ込めを開始した。

また係長、組長に対するTWI（職場内監督者訓練）などをやりはじめ第一線経営者=作業長制度の導入をすでに開始していたし、更に係長でつくられている親睦団体としての「係友会」が組合（労働者）と課長との対立の激化に対して独自の動きをしはじめ、対立をやわらげつくろおうとする意図が明らかになっていた。

この当時組合には常任専従が四〇名、非専従の職場委員長は全体で一〇〇名が存在していた。職場委員会は職場の大小（小は二〇名未満から大は三〇〇名以上）に応じて最低五名から二〇名で構成され、横浜工場と本社合せて三七の職場委員会があり、しかも職場委員会およびブロック会議は必要に応じて就業時間に拘束されずひらくことができ、ほぼ毎日ひらかれていた。そしてこの活動は生産計画の 検討、レイアウト、作業工程、残業協定、昇格の是正、要員要求等を内容とし、職場委員会はまさに生産を支配する職場権力組織の性格をもっていたといえる。

たしかに日本の自動車産業の資本競争ははげしかったが、その死活の競争をとおして自動車資本はトヨタの国内技術の独自開発、日産のオースチンとの業務提携といった本格的技術整備、蓄積の段階に入りだしていた。そのことは自動車資本が日経連の「経営権の確立」を切実な独自の要求としてもち、何が何でも資本が生産過程の支配権を再確立する以外にない段階に達していたことを意味していた。

従来の全自動車は、朝鮮特需の好況を背景に企業競争が激化していることを逆手にとり、強力な職場闘争を基礎としつつ産別単一組合によって資本に対する個別集中攻撃をかけるという闘争方法によって効果を上げていた。

しかし朝鮮戦争の休戦と特需の打ち切りによって自動車工業としての独自の発展を要請されていたトヨタ、日産、いすずにとって従来のような妥協の余地はなく、組織破壊の資本攻勢を必要としたのであり、特需利益はそれをも可能にしつつあった。

そして逆に全自動車のヘゲモニーをとり最強の日産分会の孤立化と撃破、それによる全自動車自体の解体は、まったくこれまでの階級的攻防の主客に転倒する過程にほかならなかった。

二、日産争議=労使の全面対決

先にのべた中にも日産争議、組合分裂の萌芽は、独立採算制強化による職場交渉封じこめの攻撃、係長クラスの「係友会」の独自の活動の開始の中に胎動していたといえる。

そして日産=興銀一体となった産別単一組織全自への資本攻勢は以降の技術革新へ結びつく小型乗用車生産への出発点として資本にとりいまや必要不可欠なものとなっていた。

すなわち全自動車の基本方針としての個別資本集中攻撃の最強の担い手、日産分会に対する集中攻撃が資本にとっての一致した攻撃目標となったのである。資本の側の狙いは指導分会の撃破による単一組織の解体、企業連合的再編に照準を定められ、まさにそのヘゲモニーのもとに非妥協的な攻撃が仕掛けられたのであった。

五月二三日全自動車は統一要求六本柱賃上げを中心に八項目及び一時金二ケ月分三六〇〇〇円を同時に提出した。

これに対し会社側は課長の組合からの脱退を勧誘し就業時間中の組合活動の賃金カットを強行したため、六月中、職場闘争が激化し六月二九日には生産ストップするに至った。七月四日生産再開、七月九日一時金二六〇〇〇円が回答されたが、職場放棄が起り二一日全自はスト禁止法反対スト（半日スト）三社共闘の 団結 強化に向かった。

これに対し会社側は七月一三、一四日臨時休業をもって応酬し益田組合長はこの段階で七月十六日賃上要求を放棄し一時金について会社の譲歩を要求、七月一七日部分スト、一八日トヨタ部分ストを打ったが、トヨタでは分裂策動表面化、「トヨタを守る会」が結成された。

この段階で資本の経営権確立の攻撃と職場権力の対立の間に存在する現場職制グループを中心とする組合員の企業防衛集団の公然化単一組織の分断の萌芽が登場することは必然であった。

さらに会社は七月二一日組合の部分ストに対し整備課の部分閉鎖に踏み切ったが、組合は団交再開に そなえての 質問状提出「労使間の紛争をさけ日産の将来のため良識ある判断を期待したい…」

これに対し経営者側は、興銀と富士銀から五億四千万円の闘争資金融通を行い、いすず、トヨタは争議中は日産の市場を荒さぬことを確約し、神奈川県協の斡旋で日産下請工場にはびっくりするほど仕事がまわり、動揺を防いだ。七月二三日予備交渉で組合は「相方実力行使をやめ無条件で団交しよう」と申入れたが会社側は「全面拒否」、二二日組合費の天引き事務打ち切り、二七日暴力団一〇〇人動員して組合襲撃、三〇日出荷の仮処分を夜中に決行とかさにかかった狂暴な攻撃に出た。こうした闘争の本格的な具体化に対して全自指導部はマヒしはじめている

そして八月三日いすず妥結、四日トヨタ妥結、日産は、四日以降家族への恫喝の手紙を送達。五日夜中、横浜、鶴見、吉原工場を閉鎖、人夫をやとって部課長籠城し同時に五日午前四時閉鎖物件として仮処分を申請した。

しかし、全自日産分会は人夫をオルグして壊れやすくバリケードを作らせ突破して職場に入った。横浜工場 だけでも 三百乃至四百人の人夫を雇い入れ職制と共に防衛に当ったが組合の巧妙な陽動作戦で一ケ所が突破されるという具合であった。

七日益田組合長以下組合幹部六名暴力行為で検挙され前日会社側は 再バリ、暴力団の 配置をおこなったが一〇日労働者はふたたびこれを突破、徹夜座り込み、全面二四時間ストを闘いぬき、一一日には不当検挙ー工場閉鎖反対、要求貫徹ー全支部総決起集会を開き横浜工場に全国から七〇〇〇結集・総評・地評・全自の三共闘、釈放された三名が大会に参加し圧倒的勧声をもってむかえられ地区労を中心に弾圧反対闘争、全国労働者ー政党ー民主団体が決起した。

この大カンパニアのあと一四日組合は部分スト解除指令を出したが、会社は八月二〇日雨の朝二五〇万の再バリ構築、二一日六名懲戒解雇となおも追撃、これに対し組合側は首切り反対ストの賛否をとるが八九％の多数で闘争決定、同時に居住組織設立へ向かい、さらに二六日代議委員会では幹部不信任案が提出されたが、49−13で否決した。

しかしこれが組合分裂の合図となった。三〇日東京浅草公会堂で第二組合五〇二名で結成、経理課鶴見研 究所を 中心としてであるが、係長百数十名のうち数名をのぞいて全部崩れ、組長は四百余名のうち半数以上が崩れ、その後、課長と協力し係長、組長クラスが切り崩しを継続し、事務技術系を中心こ各個撃破されていった。

このなかでなお九月七日工場閉鎖をとき 生産再開を 要求する六三〇〇人の 座り込みが 闘われたが、ついに九月九日会社側の二項目妥結条件（職場活動の禁止）を提出を機に組合は全面屈服に向かい九月十七日工場閉鎖仮処分決定、九月二〇日全体討論、二一日仮調印、二四日生産再開となった

こうして日産争議は労働者の全面敗北に終り中心的活動メンバー五六〇名の解雇となるのである。

三、課題と教訓

〈職場闘争と地域共闘〉

第一に自動車工業はその立地条件を工業地帯、工場群の中に成立することからしても、この闘争にとって工業地帯の労働者との共闘は特に重要である。関連部品工業労働者との連帯は言うまでもなく工業地帯の労働者の地域大衆反乱を組織する統一戦線が、独自に結成されねばならない。この点に関して全国及び総評、地評等の結集をもった大カンパニアの統一戦線を闘争の統一戦線に発展させる方針が問われていたといえる。すなわちあくまでも工業地帯の地域反乱の統一戦線を形成する地域労働者への働きかけは闘争主体の独自性を要求されていた。

第二により根本的には職場闘争組織の全工場、地域ベースへの活動が全自組合の組合共闘、組合的取引きの次元に収集し、職場闘争組織が全工場の共闘組織（ソヴェト）になるのを妨害する条件が工場内部に存在した。すなわち比較的多数いたいわゆる良心的職制グループの壁がそれである。いいかえれば、職場の独自闘争組織の全面的ヘゲモニーが確立しえなかったところに組合の職場闘争組織が突破しなければならない壁が存在すること。

そしてこの問題は組合的共闘と地域反乱を組織する地域共闘の中にも存在する。すなわち職場闘争、を全工場規模に展開する指導部と地域反乱を指導する統一の地区党と工場細胞の指導のもとにのみ工業地帯の労働者反乱が存立出来ることを意味する。

工場閉鎖と工場占拠（労働者管理）。

工席閉鎖に対し職場権力組織は工場占拠（労働者管理）をもって闘わねばならない。それは何よりも職場闘争組織は生産過程を管理することによって成長して来た階級的組織でありその組織性も闘争の階級性も生産過程の非和解的性格を基礎にして大衆的権力的質に成長しているのであり、それを受け入れた経営権、資本の財産権に対する労働者の管理を対抗させる以外に資本の攻撃に対抗しえないのである。それを回避し、工代会組織を作ったりすることによって展望出来るものではない。ロックアウトには 工場占拠（労働者 管理）の実力で対抗する以外に方法はなく、まさに職場闘争組織はその方針なしには圧殺されるだけである。

労働者武装と職制追放=職制の支配。

この段階でよりきびしく問題になるのはすでに「係友会」等の職制が育成されだして来ているのに対し、組合の代議会に49−13という比率の職制層の策動があるように、新しく育成されて来た最前線の資本の尖兵の活動を許したことは何によるものなのか。そして結局において二組の結成、二組と職制による又、権力とも一体になった政治的攻撃に対し、労働者の自衛的武装と組合内部で策動する職制=社民を支配屈服させる事が問われていた。逆にこれを欠くなら結局、職場権力組織の中心的担い手が彼らに政治的に支配されつづけることをまぬがれえないわけである。

すなわち、暴力団の登場に対する闘争を通じて職制=社民の政治的地位を 保障している 権力（暴力）に対抗して労働者の武装を開始し職制、社民の実態を暴露し、支配することであった。

けっきょく、日産争議は、職場労働者の闘争の中で、組合が組合としての枠を持ちつけけたことが自らの敗北を導くというパラドックスを作りしたのである。